

北辰一刀流兵法第七代宗家 大塚龍之介への七つの質問



www.hoploblog.de

大塚龍之介平政智はドイツ・ミュンヘン生まれ、本名はレッシュ・マルクス。六歳よりテコンドー、幼少期よりロングボウ（長弓）の稽古に励んだ。日本の剣の道に興味を持ちミュンヘン市内の道場で居合道を習い始めたが、本物の古流剣術を学ぶため直ぐさま渡日を決意した。北辰一刀流兵法第六代宗家大塚洋一郎平政徳の内弟子となり、その後道場養子として受け入れられた。平成二十八年三月末、大塚洋一郎より後継者に任命され、北辰一刀流兵法第七代宗家に就任。日本古流武術史上初の外国籍宗家である。

1. どうすれば内弟子として迎えられるでしょうか。

素晴らしい師との出会いに恵まれ、私は幸運にも内弟子にさせていただきました。ただ現在は非常にめずらしい例かもしれません。というのも実技と理論の両方を選ばれし弟子に集中的に行う内弟子制度は、弟子と先生の両者にとって、時間的・金銭的な投資が必要不可欠だからです。

内弟子になると稽古や古流に関わる教えを毎日受け、それは実に計十時間ほどに及びます。人間関係を深めることも大切な要素ですので、多くの場合先生と同居したり、近所に住んだりします。当然学んだことはその日のうちに消化しなければいけないため残りの時間は復習にあてられます。すると自由時間はほぼ皆無ですので、臨時収入を見込むことも難しくなってきます。

教授活動のみで生計を立てていらっしゃる先生方は、現在世界中でも数えるほどしかいません。中には日本本部と海外支部合わせて十名に満たない流派もありますので、大抵の先生方は他の仕事と掛け持ちせざるを得ません。したがって金銭的余裕があったとしても、教授に捧げられる時間は必然的に限られてきます。このような状況を踏まえた上で内弟子を迎えとなると、後継者としてふさわしい人物にきちんと育てられるのかといった責任問題も生まれてきます。

もしあなたが内弟子を迎えたい先生に出会えたならば、次のことも参考にして下さい。内弟子の生活費は通常先生が賄ってくださいますが、内弟子が自腹で指導費を払わなければならない場合もあるかもしれません。また内弟子になったからといって、流派を次代に伝承する師範や後継者に必ずしもなれるわけではありません。しかし内弟子として受け入れていただけたならば、その可能性を十分に秘めているわけです。どうぞ先生を信じて、初志貫徹してほしいと思います。



北辰一刀流兵法第六代宗家と第七代宗家による演武

2. どうすればドイツ人が日本名を頂けるでしょうか。

茶道や作刀のような様々な日本の伝統芸能及び伝統芸術では、先生が次の世代に自分の名字を受け継がせるのは、昔からごく普通なことでした。技や教えが「同じ名字」で次の世代に受け継がれていくことを大切にするため、血縁者の中に相応しい後継者がいなければ、腕の立つ弟子を養

子として迎え、自分の名字を与えました。この「養子制度」は、大名家においても、古流武術においても、伝統や技を保存するための大事な対策だったのです。

この制度は現在でも一般的です。例えば、スズキ株式会社の代表取締役会長鈴木修氏もスズキに入社してから鈴木家より養子として迎えられました。キャノン、トヨタ、キッコーマン等のような日系企業も養子を迎え、ビジネスを受け継がせています。

古流武術の世界では、天真正伝香取神道流の例が最も有名です。昭和4年、ある大学教授が飯篠家の女性と結婚し、養子として迎えられました。婿養子という形で飯篠家に入り、飯篠金次郎という名をもらって、第十九代宗家に允可されました。

私の場合は道場養子と呼ばれます。第六代宗家大塚洋一郎は実子がいなかったため、弟子達の中から最も相応しい後継者を選びました。私が免許皆伝（当流最高段位）を伝授された平成二十六年のことです。そしてその時、大塚龍之介平政智という武道名を与えられました。第七代宗家襲名披露は、二年後の平成二十八年三月、第五代宗家千葉弘政胤や千葉家子孫などをはじめとする諸先生方にお集まりいただき、東京中野サンプラザホテルにて執り行われました。

3. 北辰一刀流兵法とは何ですか。また、その教えはどのように構成されていますか。

北辰一刀流兵法は江戸時代後期に剣聖千葉周作平政政によって創始された「古流武術」で「総合武術」です。神道無念流、鏡心明智流とともに江戸三大流派のひとつでした。鏡心明智流は昭和時代に途絶えましたが、神道無念流は今も存在します。「古流武術」とは、江戸時代まで、つまり廃藩置県前に創始された実戦的兵法を説く流派のことです。したがって古流武術の流派は、伝書や資料による復元がなく、師匠から弟子へ直接教えが伝承されています。「総合武術」というのは、一つの武器に限らず様々な武器の使い方を指導するということです。素手になった場合でも戦場や決闘で生き残れるよう、その術を教えています。

北辰一刀流は「剣術」「抜刀術」が主ですが、「長刀術」「柔術」も当然あります。目録の大半は剣術と長刀術が占め、長刀術は剣術の体裁きや技を基本に構成されています。長刀術は長刀対剣、長刀対槍の計二十九本です。「剣術」「抜刀術」「長刀術」を合わせると、表のみで計百八十二本の形が存在します。「柔術」「剣術の裏の形」「抜刀術の裏の形」はごく一部の弟子にのみ口伝として伝えられます。

それに加えて「撃剣」と呼ばれる、竹刀と防具を用いて相手を自由に打ち込める稽古も、北辰一刀流に必要な要素です。歴史を遡ってみると、江戸時代後期、殆どの流派でも撃剣稽古が行われました。例えば「撃剣試合覚帳」では、天神正伝香取神道流第十六代宗家飯篠盛重が香取神宮にて他流と試合を行い、中段の構えをしたことが確認できます。しかし太平洋戦争を境に、多くの流派で撃剣稽古は廃れていきました。現存する百の流派のほとんどが過去に撃剣稽古を行ったと言われていますが、神道無念流、心形刀流、小野派一刀流、香取神道流、無外流をはじめとする多くの流派では今では撃剣稽古は行われていないようです。一方、北辰一刀流をはじめとして直真影流、念流、天然理心流、新陰流の一部の系統とその他幾つかの流派では、撃剣の伝統が今でも保存されています。

北辰一刀流の撃剣稽古は「剣道の祖」として今なお評価されていますが、太平洋戦争後に独自の発展を遂げた現代剣道とは今では趣旨を異にしています。撃剣はあくまでも真剣勝負での命のや

り取りを想定した「練習」にすぎません。本物の試合は実戦にあるからです。互いに真剣を手にする実戦では、相手を打ちに行く時、身を守る術を忘れて闇雲に相手へ飛び込むと自分が負傷してしまいます。つまり常に死と隣り合わせなのです。このような状況を想定した厳しい修行を、「撃剣」を通して数多くこなすことで、剣士は腕を磨くのみならず、剣の道の土台となる人間形成をも自然と育成することができます。



北辰一刀流兵法の撃剣稽古

北辰一刀流の撃剣稽古には四段階あり、まずはじめは「形稽古」です。その後、学んだ技を試すため「打ち込み稽古」を行います。打太刀の打ち込みに対して仕太刀がどのようにすれば効果的に防御できるかの練習です。最初に守り技（後の線）に集中するわけは、昔、経験の浅い剣士が剣の達人と戦わなければいけない状況になった場合、相応しい受け止め技を使えるか否かが生死を分けたからです。

ある程度打ち込み稽古が出来るようになると、寸止めを行わない「試合稽古」に入ります。当流の撃剣と剣道との大きな違いは防具の使い方です。防具は相手に重症を負わせないために着用されます。したがって剣道で狙える箇所は面、小手、胴、付きのみに限定されますが、北辰一刀流の撃剣ではどこを打っても構いません。ある程度の遣い手になると、防具すらつけずに竹刀で撃剣稽古を行います。言うまでもありませんが、この稽古を行えるのは腕や技を相当に磨いた弟子のみなので、防具なしでも重症を負わせずに済みます。

そして撃剣の最終段階が「真剣勝負」です。ここでは真剣を用いて戦います。ただしヨーロッパの決闘のようにどちらかが傷つくまで戦うわけではなく、あくまでも「寸止め」という規則のもとに行われる、剣士達の優れたコントロールと卓越した技を証明するための「試し合い」です。非常に危険な練習のため、真剣勝負に挑めるのは当流最強の剣士として認められた門人に限られます。従って、北辰一刀流の撃剣では多くの場合は防具を着用し、竹刀を用いるため、一見すると剣道と区別がつかないかもしれません。

4. どこで北辰一刀流兵法を学べるのでしょうか。

現在、北辰一刀流兵法には二つの道場があります。東京とミュンヘンです。私が第七代宗家を免許されて以来、ミュンヘンにある千葉道場が本部道場となりました。本部道場が日本から海外に移転されるのは、当流の歴史において実は二回目です。第四代宗家であった千葉東は大正時代に仕事上の都合で千葉道場を閉めて台湾に移住し、台湾に本部道場を構えました。

千葉道場は流派の創設以来、常に一般の方々にも広く門戸を開いてきました。武士のみならず、農民・商人・女性や子供まで、階級を問わず誰もが入門できました。それによって全国から多くの門人が集まりました。しかし一般人に対するこのような扱いはむしろ稀です。例えば、薩摩藩を中心に伝わった示現流では師範の寡婦が稽古に立ち会うことすら禁じられていました。門人数が増えないよう厳しい規則を取り入れていたのです。しかし一方で武士階級出身でない人が武芸の才能を発揮できた例もあります。その有名な例が豊臣秀吉です。織田信長の後継者であった秀吉は下層民の家に生まれたにもかかわらず、信長に仕官して頭角を現した結果、天昇十三年に朝廷より関白宣下を受けることができました。千葉道場も同じく、門下生の身分を問わず才能ある人を育成するのを目的としていました。そうすることで千葉道場は日本中に北辰一刀流を普及させ、多くの有名な剣士達を生むことができたのです。

現在も昔の方針を受け継ぎ、北辰一刀流兵法はより一層国際的に流派を広めようとしています。当流では、免許（中目録）及び道場目録を授けられた師範だけが自らの門下生を取って、流派の技や哲学を指導することができます。つまり「道場」を構えられるのは「師範」のみです。しかし師範への道は厳しく、誰もが師範になれるとは限りません。そこで「同好会」というシステムが導入されました。先代宗家または私と密接な関係がある「会長」が、皆で稽古できる同好会という場を設けることができます。同好会会長は年に二度私の個人セミナーと、一般セミナーにおける最低五日間の連続稽古を誓約します。一般セミナーはミュンヘンで年二回、日本で年一回です。場合によっては同好会主催セミナーも開催されます。そうすることで一般セミナーへの参加が困難な門下生も、私からの直接指導を受けることが可能です。



現在の千葉道場

北辰一刀流兵法の同好会は現在スイス（バーゼル）、ドイツ（ボン及びオスナブリュック）、ポルトガル（ブラガ）、ハンガリー（ブダペスト）、オーストラリア（キャンベラ）、そしてイタリア（フィレンツェ）の世界六カ国七都市に開設されています。同好会会長は同好会のメンバー

に手本を見せて一緒に稽古することは許されていますが、そのメンバーは会長の弟子ではなく、あくまでも北辰一刀流兵法に入門した北辰一刀流兵法の門下生です。なお会長が中目録（免許）と道場目録を授けられた場合、同好会は支部道場に昇格し、会長から館長となります。またメンバーは館長の門下生となり、館長は新たに自らの門下生をとることもできるようになります。

5. 幾つかの流派には手裏剣術や棒術、或いは忍術のような補助的手段が伝承されていました。北辰一刀流兵法にも時代と共に失伝したものがありませんか。

当流には手裏剣術や棒術、忍術はもともと存在しません。ただ師範の中には手裏剣術の名人である海保帆平（願立流手裏剣術の宗家）や根岸松齡（安中藩荒木流（剣術・槍術・柔術）の第十三代宗家並びに根岸流開祖）がいます。形の失伝や創作に関しては、当然存在します。判断は宗家や師範など個々の指導者に任されており、不必要と感じれば形は減り、必要があれば追加されます。諸々の増減は体系的にまとめられていないため分かり兼ねますが、大きな変化としては「家伝形」が表抜刀術に加えられました。この十本の形は周作の三男千葉道三郎平光胤によって作られました。



北辰一刀流兵法の全巻物

ここで私の師匠である第六代宗家大塚洋一郎先生の素晴らしい言葉を引用したいと思います。「流派は川と同じです。初めは何処からともなく水が湧き出て泉が生まれます。その後小川となり、流れが強くなったり速くなったりもします。激流になって地形を変える支流もありますが、川の本質や主な特徴が変わるわけではありません。」これこそ日本武芸の本質だと実感しています。神秘的に伝わった武術や天狗に師事した剣士の物語、また歴史的な事実関係が疑わしい流派を除けば、日本古流武術というものはまるで川のように発生したに違いありません。世が常に変わるように、どんな流派も多少なりとも定期的な変化を体験します。物事が永遠に同じ状態で存在することなど不可能だからです。

最も古い剣術流派といわれる念流は、その良い例と言えます。六百年以上前に相馬四郎義元によって創始された時には、弓術・長刀術・槍術・馬術が主でした。戦闘方法の変化で兵士と兵士と

の間合いが詰まってくると、武器の形を変えたり武芸を進化させたりして対応してきました。最大の変化は江戸時代です。新たな戦術が現れたため、念流は新陰流の開祖上泉伊勢守藤原信綱が考案したとされる「袋竹刀」を使用した稽古をすぐに採用しました。その後は袋竹刀を用いた試合稽古に必要な防具も開発するなど、常に道具の改良に努めました。このようにして、念流は強い流派であり続けるために弓術のような古くなった武芸を捨て、時代の戦法に即した新しい稽古方法を導入しています。数世紀にわたる時代への適応力を身に付けたことによって、封建時代の最後まで多くの腕の立つ剣士を生むことができたのです。その他には直心影流や一刀流、新陰流の幾つかの系統も念流と同様な過程を経ました。ただし小さな流派が優れた剣士を育成しなかったわけではありません。流派の知名度に関係なく、強い剣の達人は数えきれない程いました。

上述した流派が有名になったのは戦場や決闘で卓越した才能を発揮した剣士達が、時代をまたいでもなお存在したからです。ただ、流派の宗家や師範は形の変化に関する書物を殆ど残していないため、流派内の変化やその時期を把握するのは非常に難しいことです。異なる時代の巻物と伝書を照らし合わせるしか方法はありません。しかしあらゆる流派にとって最も大事なものは、極意という流儀の真髄が変わらずに存在するという事です。先代の言葉を借りれば「流派が頻りに変わっても、その泉は変わらない。泉が枯れると、川も死ぬ」のです。

個人的には、時代に即した要素を取り入れながら本質を変えずに一線を走り続けてきた念流を極めて尊敬しています。北辰一刀流の初期の弟子の幾人かは、武者修行で行った他流試合で周作が念流の高弟に勝った後に北辰一刀流へ入門しました。当流が名を上げたのは実はこの勝利がきっかけです。念流は負けを味わったにもかかわらず、名誉が傷つくことなく現在に至るまで伝承されてきました。以上の点からも誠に生命力の強い流派だと思います。

私が所有する資料の中に、当流や他流の形の追加・削除に関する詳しい情報が記されているものがあります。国会図書館では、形の変化を証明できる手がかりをいくらかでも見つけることができます。多くの流派では形の変化を公にすることはあまりしないようですが、隠す必要はないと思っています。どの流派にもあるはずで、むしろ時代を超えても流派が存在していること自体が、賞賛に値することなのです。

6. 古流武術を学びたいと思っている人は何をすれば宜しいでしょうか。

先ず、よく調べることが大切です。流派の歴史や開祖に関する情報だけではありません。これから人生を共にするその流派が自分に相応しいかを見極めるため、入門する前に入念な下調べを行ってください。ただ雰囲気を楽しみたいのであれば、どんな流派でも構わないでしょう。しかし本物の古流を学びたいのであれば、流派の歴史について勉強しておくのが大前提です。現在では日本語はもちろん、英語やドイツ語で書かれた本もたくさん出版されていますから、古流のいろはに関していろいろ学べると思います。

中には残念ながら、公の場で技を見せたり教えたりしてこなかったと主張する流派や、途絶えた流派の名を利用して唯一の免許皆伝継承者であるように振舞う人もいます。これは歴史を捏造しようとしているので注意が必要です。江戸時代、武術の指導に携わる者は幕府に厳しく支配されていました。密かに練習する団体の噂を聞きつけようものなら、政府への抵抗を目論んだとして幕府に抑制されました。人目につかず流派が伝承されることなど不可能だったのです。また剣術師範は常に危険と隣り合わせでした。毎日のように道場に現れる新たな相手に倒される可能性も

ありました。剣術の世界で負けを味わうことは、流派の名誉を傷つけられるのみならず、多くの弟子を失い、最悪の場合は命を落とすことを意味します。よって自分の名を上げて数多くの弟子を持つことこそが、剣の道で生きる唯一の方法でした。誰にも知られず、弟子がいない流派の師範などメリットがありません。山奥に隠れていた流派の話は小説の中だけの話、根拠のない流派を作った人の言い訳に過ぎません。

優れた技を身に付けたいならば、手っ取り早く確実な方法としては、過去に有名な剣士を生んだ流派を学ぶことです。初心者は演武や動画を見ただけでは技のレベルを理解するのは不可能だからです。もちろん披露されている技に一目惚れした流派を学ぶのも良いでしょう。優れた技を身に付けるための道は一つではありませんし、特別な流派でなければ強くなれないというわけでもありません。案外、自分に相応しい流派の道場が家の近くにあることもあります。それから、多くの時間を共に過ごすことになるので、先生やその門人たちとの相性も重視して下さい。先生の人柄が自分に合わなければ流派を好きにはなれませんし、門人と仲良くなれそうかということも大切な条件です。道場内の雰囲気はどうかに注目して下さい。そして外国の方へは、外国人の高段者が既にいる流派への入門を勧めます。悔しい話ですが、古流の世界では人種差別の問題が今も消えません。外国人という理由で入門を拒否する流派や高段を絶対に与えない流派が今もあるということは付け加えておきます。

もし入門を許可されたならば、どうか流派の勉強に身を捧げて下さい。道場で稽古に参加するだけでは上達の道は難しいです。道場にいない時にも自分で稽古し、歴史や文化を学ぶことこそが流派の勉強なのです。そうやって誰よりも努力すれば、早く上達していきます。

古流武術史上初の外国籍宗家として私が後継者に選ばれた時、お祝いの言葉を多くの流派や先生方よりいただきました。しかし他流派のごく一部の宗家や師範は、大塚洋一郎宗家に手紙や面等向かって抵抗感を示したそうです。その方々によれば「古流武術は日本のものだから日本人だけが受け継ぐべきだ」「どんなに優れた技を持っていても、どんなに日本語が流暢に話せても、外国人は流派の後継者になってはいけない」とのことでした。

しかし歴史的な視点から眺めてみると、過去には武士の資格と日本名を与えられた外国人がいます。最も有名な例はオランダ出身のヤン・ヨーステン・ファン・ローデンスタイン、英国出身のウィリアム・アダムス、そしてプロイセン出身のジョン・ヘンリー・スネルです。特にスネルは会津藩主松平容保より平松武兵衛という日本名を与えられたのみならず大小の帯刀も許され、武家の女性と結婚してからは会津若松にて屋敷と本人に仕える家来をも与えられました。

外国人に対する古い先入観を持つ流派がまだあることは確かですが、誰でも自分にとって居心地の良い流派というのは見つけられると思います。完璧な環境の整った流派の道場が近くになれば、時には憧れる流派を学ぶため「旅に出る」程の覚悟もしなければなりません。古流への熱い思いがあるならば、時間とお金をかけてでもやってみる価値は絶対にあると思います。

7. 北辰一刀流兵法の新しい宗家として何かを変える予定でしょうか。

北辰一刀流の教えや技については、変えないことを保証します。私の目的の一つめは、流派を受け継いだ形で次代に伝承させることです。これまで二世紀にわたって他流との撃剣試合でも、命を懸けた真剣勝負でも、その優れた技をもって活躍したからです。しかし言うまでもありませんが、私は常に上達するよう努力するつもりです。そして、弟子にも同じような努力を求めます。

何もせずに北辰一刀流の名前だけで生きていと当流の名誉を汚しかねません。流派に属している者が強くなければ、流派自体も強いわけがありません。どんなに輝かしい過去であっても、宗家の宿命は常に腕の立つ剣士を育成し続けることにあると思います。

それから、激しい撃剣稽古の必要性をより一層主張したいと思います。大正時代以降、どの流派も撃剣稽古から形稽古へと比重が移っていき、最終的に撃剣稽古が完全に絶えた流派も数えきれない程あります。しかし撃剣流派であるならば、試合稽古を行ってこそ流派の技が生かされるはずです。他流との試合稽古の場合は、天然理心流武術保存会にお願いしています。天然理心流武術保存会は免許皆伝並びに師範である加藤恭司先生を代表とする団体です。卓越した剣の腕の持ち主で、現在最も優れた剣士の一人です。相手の兵法が読めない他流試合は、同じ流派内の試合稽古以上に集中力が求められるため、剣士の才能を発揮させるにはなくてはならない要素です。今後も天然理心流との交流を大切にしていきたいです。何にせよ撃剣の他流稽古を通じて二つの流派が良い関係を築きながら同時に強くなれるというのは大変素晴らしいことだと思います。



右は天然理心流武術保存会代表の加藤恭司

他流試合以外では、優れた才能を発揮できる後進の育成に力を入れたいと思います。周作先生と当流代々の宗家はこれにより腕の立つ剣士を生むことができました。ですから例えば他流派に属していても、北辰一刀流に対して興味を示して下さるならばその人を大歓迎します。その昔も、他流の高段者で北辰一刀流を学びたい気持ちがある者にはそのような扱いをしてきました。形稽古と試合稽古で才能を計り、戦術に関する深い知識を持っていることが分かると直ぐに高度の技を教えていました。彼らは高度な技の傍らで初心者向けの技も同時に身に付けることが許されました。それにより非常に早い上達が期待できました。たった一年で免許（中目録）や免許皆伝（大目録）を授けられた他流派の遣い手の記録も残っています。私も当流の未来のために、同じ方針で望むつもりです。もちろん古流剣術のみならず、現代剣道や居合道の高段者も歓迎しています。

北辰一刀流兵法は当流の教えを学びたい人に対しては、国籍・宗教・身分を問わず門戸を開いています。当流の規則に従い、流派の名を汚さない限りは、全門人に平等な機会が与えられます。そして技術・哲学・歴史・特別な知識を身に付けた者が免許皆伝を允可されます。稽古と日本の伝統的芸術に関する勉強の両方に対して非凡な努力を見せる門人に対しては、私も先代宗家も全面的にサポートしていきたいと思います。才能と稽古と知識こそが強い流派を生み出すのです。